

元国土交通省熊本河川
国道事務所長



森田 康夫

肥後熊本の東西交通路は、古代官道の時代から阿蘇の二重峠を通っていました。平安中期に編さんされた「延喜式」には、肥後国に「二重」という駅家^{いりや}があつたと記録されています。

二重峠（標高683メートル）は北外輪山の西側の最も低い地点。阿蘇開拓の神、健磐龍命^{けんばんりゆめい}が外輪山を蹴破ろうとしても、二重になつていて破れなかつたという神話が語り継がれています。

17世紀初頭、二重峠を越えるルートは、加藤清正公によつて「豊後街道」として整備されました。その後、細川藩が参勤交代路としたため各地に宿場が誕生し、街道は大いに栄えました。時は流れ、近代。1884年（明治17年）に、立野火口瀬を抜け、熊本から阿蘇に至る新道（現在の国道57号）が開通。以来、二重峠を越えるルートの重要性は薄れていきました。

ちなみに二重峠を蹴破れなかつた健磐龍命は、別の場所では見事に成功し、外輪山の内側は湖から豊かな平野に変わりました。その場所が立野火口瀬。立野の地名は、力余つて尻もちをついた健磐龍命の「もつ立てぬ」との言葉に由来します。

そして現代。熊本地震は再び二重峠ルートの重要性を顕在化させました。通行止めになつた国道57号の迂回路として一時、峠を通るミルクロードが幹線交通を担つたのです。また、昨年10月に開通した国道57号北側復旧道路は、神様も蹴破れなかつた二重峠の下を約3・7キロのトンネルで貫通しています。

二重峠ルートには、時代の変遷と技術革新の積み重ね、そして阿蘇神話から始まる長い歴史の物語があります。

二筆

二重峠 神話から現代へ